
まどろみのまち

幸谷遙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まどろみのまち

【著者名】

N4978B

【作者名】

幸谷遙

【あらすじ】

何の変化も望まない日々を送る。いつもと変わらない日々のことなどをどうして覚えているのか。

（略）

身元のわからない浮浪者が死んだ朝だつた。

その男の死に顔は安らかで、死後の平穏を祈る身としてはやりやすい。

身元不明というのは正しい言い方ではないだろう。この死者を運んできた者の何人かは彼が何者であるか知っているはずだ。と言つたところで、私とこの男の間に何の繋がりがあるわけでもなく、仮にこの男が生前は裕福であつたとか聖人であつたとかいうところで私に何らかの感慨を起こすことはない。何であれ私の役目は変わらない。

夜明け前に運び込まれた死体についての記録を台帳につけると、呼び寄せた人夫二人が到着した。一人がかりで死体に麻布を巻き付ける。

有志よりいくらかの献金が納められたため、彼は共同の墓穴に放り込まれれる。

さもなくば市のワゴン車に積まれて解剖の実験台だと標本の材料にされるだとかいつたあまり嬉しくない用途に活かされる。かといつてあの墓穴もいかがなものか。

何らかの理由で毎日人が死ぬ。この過密都市では致し方なくつまるつまらないに関わらずあらゆる理由で人が死ぬ。

今回の死者のように棺に收められないことが大半。棺代わりの粗末な布を巻かれ十数体まとめて埋められる。これらの死者に墓標はない。

そればかりか墓は定期的に掘り起こされ新たな死体を埋める穴を何度も開く。

死者は増えるが墓地の土地は限られている。つまるところ共同墓地とは死者を悼むための墓ではないのだ。

二人がかりで死体を抱えあげ、私を先頭に郊外の墓地へ。教会の扉を開くと何人かの参列者が加わった。

空はくもり模様。雪が降り積もり街は雪景色。天も地も白く境界の曖昧なこと。

吐き出される息も一様に白い。

この死者はゆうべの寒さにやられたのだろう。寒さの死は、生物に穏やかな最期を与えるらしい。気付かないうちに逝けるとか。眞偽は当事者にしかわからぬけれど。

午前中、空気がゆるやかに昇りつめていく時間帯。道行く人々が我々の行列を振り返り、目を伏せる。

途中、担ぎ手が交代した。参列者が申し出たのだ。
墓地に辿り着き、門を開く。既にいくつか死体が放り込まれた穴が一つある。

墓穴に放り込む前に私がお祈りの言葉を唱える。俯き神妙に聞き入る参列者達。ひどく茶番めいている気がしてたまらない。

葬儀が済めば参列者達は思い思いの方向へ散つていった。あとには私と二人の人夫、そして死者が残つていた。

「ご苦労だがこの穴を埋めて新しい穴を掘つておくれ。」

毎日人が死ぬので、穴に雪が積もるより先に死体でいっぱいになる。

人夫達は穴に土をかけると、死体の分だけ余った土を隅の方に運んでいった。

寒さが身を刺すような中、作業のために身体を動かす彼らの頬は紅く暑そうに汗を拭う。

することのない私は手持ち無沙汰に墓地を歩いて回った。墓の一角には栄えた頃の莊厳な墓。指先のかけた天使の彫像が見上げる者に何かを語りかけるよう。

不意に柵の外に赤いものの像が表れた。それは赤いマフラーだった。そしてマフラーを巻いた人物が手を振つたので私は柵に近寄つた。墓地は周囲より高くなつてるので自然、彼を見下ろす形になつた。

「お早ようございます。牧師さん。」

「今日は早起きなのだな。」

「まあ色々あります。」

軽口を叩くモスグリーンのコートに身を包んだ若者、ルーク氏が私の背後を覗き込む。

「人死にですか。昨夜の寒波で逝つてしまつたのは一人や二人ではないでしょ？」

「私のところにやつて来たのは一人だけだよ。」

「しかし市の衛生係の車を一台見ました。」

ルーク氏は街の裏側に携わつてゐるおかげが街の様子にかなり通じていた。世間話に今朝のことを話していった。

「おや、牧師さん呼ばれていますよ。」

振り向くと人夫のうち一人が呼んでいた。

「では失礼するよ。」

「あとで教会にうががいます。」

「ご招待ですよ、と彼は付け加えると頭を下げて通り過ぎていつた。」

そしてルーク氏が教会を訪ねて来たときはまだ午前中だった。

「雪が降つてきました。」

挨拶のあとルーク氏が言った。私は傘を差し、ルーク氏にいざなわれて住み処をあとにした。

十分ほど歩いた。でこぼこの石畳の上に雪の粒が落ちて溶けた。「ここの辺も再来年には開発が始まることでしょう。区画整理の過程で住まいを追われるものがないように上方でも尽力しているようです。」

崩壊した建物を眺めながら相槌を打つ。

やはりこの先に何があつても私の日常は変わらないだろう。人がやつてくれれば受け入れるだけ。

雑然とした街路を抜ける。ルーク氏のあとについてこの道を歩くのは何度もだろう。数えたこともない。道の先にあるのは小綺麗な集合住宅である。その一室に住む婦人に私は招かれたのだった。

ルーク氏が呼び鈴を鳴らすと家政婦の娘が出て来た。彼女に外套と傘を預けると、応接間に通された。妙齢の婦人が笑顔で私達を歓迎する。ノイマン嬢である。

「よく来て下さいました。お忙しいところわがままを言いました。」

「おはようございます。今日の『』加減はいかがでしょうか？」

彼女はルーク氏の目上に当たる人物の令嬢である。脚を悪くして家政婦の娘と二人で暮らしていた。

「昼食にはまだ早いですわね。」

「いえ、気になされることではありません。」

出されたものは紅茶と焼き菓子だった。ルーク氏も相伴にあずかる。

長いこと歓談し、昼過ぎに一人退出した。午後に教会を訪ねて来れる人がいるかもしれないから。

連なる青く塗られた扉の郵便受けから一様に広告が押し込まれ、雑多に飛び出している。

廊下にこぼれ落ちた一枚を拾い上げた。黄色の紙に印刷された文字は手書きで過激な言葉が綴られていた。主義主張から縁遠いところに身を置く私には到底理解できない事柄だった。

「プロパガンダですね。まあこれだったら安売りの過剰広告のがずっと有り難いです。」

いつの間にやら後ろに立っていたルーク氏が私の手からその広告を取った。

「俺の兄なんかもやつてますがね、俺には全く性に合わないです。現状に何の不満もないですし。」

「不満か。」

「まあ歩きながら話しましょう。そうですね、俺が見る限り日常の不満を大きなものにぶつけているようなもんですよ。壁に小石をぶつけても何にもならないのにほかに思い付かないんです。」

灰色になつたコンクリートの階段に足をかけた。

「はあ、なるほどね。一理あることだろ。」

「これは愚痴ですけどね、兄というのが俺が手前と同じ用に感じないのを愚鈍であるように言つのが頭に来るんですね。」

私が知る限りでもルーク氏にそんな印象はないのだが。

「俺を阿呆にしなきや手前が阿呆つてことになるからいいんです。」

そこで語調を変えた。

「アアすみませんね。身内の話なんかしきやつて。申し訳ついでにもう一つ付き合つてください。」

再びルーク氏に誘われていつた場所は市街の中央を抜ける川の岸部だった。

「お嬢さんの処で連絡貰つたんですけどね。どうも心中であるらしいのです。ナニをまったくこんな口ひいて訳ですが。すみません。生き残つた方から事情を聞き出してくださいな。」

傘を傾けて空を見やる。降る雪の量がどんどん増していく。岸部に近寄つた。毛布を被せられた女は震え、惨めに縮こまり鳴咽を漏らしていた。

心中の片割れは川の底から引き揚げられ、船底で横たわった死に顔をルーク氏が検分していた。

何とか女をなだめ話を聞くところ、行きずりの関係であり男の方が無理矢理死のうとしたそうである。それは遅い朝のこととそれなり彼の女は岸辺で震えていたのだそうだ。

「ああそれは怖かったでしょうに。」

心にも無いことを口走る自分を悪人だと思つ。それでもこのみすぼらしい女の恐怖など想像出来ない。

大体の事情を聞き出すと女をその友人に委ね、ルーク氏にそれを説明する。彼はそんなところだろうと無感動に言った。

「顔見知りなのか。」

「まあちよつとした。」

川の対岸を眺めながら言つ。

「もうじき死体を引き取りに役人が来ますよ。一応死因を調べるそうです。」

そして前に垂れ下がったマフラーを跳ね上げて踵を返した。

その日から一週間ばかり経つたあと、ルーク氏は老いた母親とともに姿を消した。

人づてに聞いたところ、あの日川で死んでいたのはルーク氏の兄であつたらしい。そう言われると納得できる点がいくつもあつたけれど私は気付かなかつた。私の仕事は詮索することではないのでそれで構わない。

あれから月日が経ち膨大な日々が記憶の中で曖昧に溶け合つている。取り立てて特別な日ではないというのにあの日だけはつきり思い出せる。

あの日を思い出す目印は、まず朝から身元不明のわからない死体が運び込まれ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4978b/>

まどろみのまち

2010年10月8日14時21分発行